子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Association between maternal multimorbidity and neurodevelopment of offspring: a prospective birth cohort study from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル：

妊娠中の多疾患併存と子どもの神経発達の遅れとの関連：エコチル調査

ユニットセンター（UC）等名： 北海道ユニットセンター
サブユニットセンター（SUC）名： 旭川サブユニットセンター

発表雑誌名： BMJ Open
年：2024　DOI： 10.1136/bmjopen-2023-082585

筆頭著者名： 赤木 孝暢
所属 UC 名： 北海道ユニットセンター

目的：

多疾患併存（Multimorbidity）は高齢者において多くの研究がなされているが、若年者における多疾患併存についての報告は少なく、妊婦の多疾患併存についての報告は特に少ない。本研究では妊婦の多疾患併存と子どもの神経発達の関連について検討した。

方法：

エコチル調査に参加した 82,877 組の母子データを使用した。妊婦の併存疾患数を、なし、1 疾患、2 疾患以上（多疾患併存）と定義し、子どもの神経発達の評価は 6 か月から 4 歳までの 6 か月毎の日本版 ASQ-3 の結果を用いた。妊婦の併存疾患数と子どもの神経発達の関連を、母親の年齢、出産回数、母親の教育歴、母親の喫煙習慣、母親の飲酒習慣、家庭収入、子どもの性別の因子を含めて多変量ロジスティック回帰分析を行い検討した。

結果：

妊婦の併存疾患で最も多かったものは痩せ（15.6%）で、ついで肥満（10.7%）が多かった。妊婦の併存疾患数ごとの割合は、それぞれ、併存疾患なし（65.8%）、1 疾患併存（30.6%）、2 疾患以上（3.6%）だった。妊婦の多疾患併存は子どもの神経発達の遅れと関連した。妊婦の併存疾患数が増加すると子どもの神経発達の遅れとの関連が強まり、また子どもの年齢が上がると妊婦の多疾患併存と子どもの神経発達の遅れの関連が強まった。

考察（研究の限界を含める）：

妊婦の併存疾患数が増加すると、子どもの神経発達の遅れとの関連が強まるのは、併存疾患数が増加すれば子どもの神経発達に影響を及ぼす要因が増加する可能性などが考えられる。また、子どもの年齢が上がるにつれて妊婦の多疾患併存と子どもの神経発達の遅れとの関連が強まったのは、出生後の脳の発達、養育環境、養育者の子どもに対する発達評価など複数の要因が影響を与えていた可能性などが考えられる。
本研究の限界として、診断はされているが治療がなされていない場合を併存疾患に含めていない、生物学的なメカニズムについての検討は難しい、調査参加者は協力者であり全ての妊婦が対象となっていない、母親の出産後の状況のデータを用いていないなどがあげられる。

結論：

妊婦の多疾患併存は子どもの神経発達の遅れと関連していることが示唆された。